Ⅱ．マテンゴ語の文法

第３章　マテンゴ語の音韻概要

この章では，マテンゴ語の音韻体系と音韻規則の概要を述べる。マテンゴ語は，他のバンツー諸語と同様に，膠着性が極めて高い。語にはいくつもの接辞が付くが，その結合の際には頻繁に音韻交替が起こる。音韻交替の規則は，音韻を理解する上で重要であるだけでなく，形態論の前提としても必要である。その中には形態音韻論の範疇に含まれる事項もあるが，バンツー諸語の性質から，音韻的要素と形態的要素を切り離してしまうことは難しく，音韻論と形態音韻論の境界は曖昧にならざるを得ない。

3.1. 音素とその音声的特徴

3.1.1. 母音

マテンゴ語の母音体系は以下のとおりである。

i					u		i:						u:
	e					o			e:				o:
		ɛ					ɔ				ɛ:				ɔ:
				a									a:		

i，e，ɛ，a，u，o，ɔ の７音に対して，それぞれに長短の対立がある。

７音の対立

i	:	/-límb-/ 「強姦する」			/-lím-/	「飼育する」
e	:		/-kéŋg-/	「飲ませる」	/-lém-/	「畑を耕す」
ɛ	:	/-lémb-/ 「刺青する」	/-kéŋg-/	「仲裁する」	/-lɛ́m-/	「避難する」
a	:	/-lámb-/ 「なめる」	/-káŋg-/	「押す」	/-lám-/	「生きている」
u	:	/-lúmb-/ 「呪祷をする」			/-lúm-/	「かみつく」
o	:	/-lómb-/ 「つなぐ」	/-kóŋg-/	「結ぶ」		
ɔ	:	/-lɔ́mb-/ 「買う」	/-kɔ́ŋg-/	「だます」		

長短の対立

i,	i: :	/-lít-/	「冷静である」	/-lí:s-/	「相続する」
e,	e: :	/-lé-/	「泣かす」	/-lé:-/	「食べさせる」
ɛ,	ɛ: :	/-kélɛl-/	「肉をばらす」	/-ké:lɛl-/	「熟す」
a,	a: :	/-lá-/	「擦切れるまで着る」	/-lá:-/	「向ける」
u,	u: :	/-kúlil-/	「畝に土をかける」	/-kú:lil-/	「ふちをかがる」
o,	o: :	/-dʒób-/	「隠れる」	/-dʒó:b-/	「皮をはぐ」
ɔ,	ɔ: :	/-hól-/	「～しそうになる」	/-hó:l-/	「穴を掘る」

このように短母音と長母音は対立しているが，それとは別に，ポーズの位置の音節（以下「末尾音節」）が長母音以外の場合には，その前の音節（以下「次末音節」）の母音は常に長母音で現われる。

1)	/ líbagu /	[líba:ɣu]	「斧(5)[1]」
2)	/ lúha:gí /	[lúhă:ɣi]	「おかず入れ(11)」
3)	/ líbagu lilihulá /	[libaɣu lilihú:la]	「古い斧」
4)	/ lúha:gí lwilihulá /	[lúha:ɣí lwilihú:la]	「古いおかず入れ」
5)	/ líbagu alé:/	[libaɣu alê:]	「この斧」
6)	/ lúha:gí aló:/	[lúha:ɣí alô:]	「このおかず入れ」

例の１と２を比べると，いずれの場合も次末に位置している音節は長母音として実現されている。しかしながら例３のように後続語を置いて / líbagu /の /ba/を次末音節という環境から外すと，これは短母音で現われ，代わって次末に位置する / lílihula/の /hu/ の母音が長母音で実現されている。つまり，例１で / líbagu /の /ba/が長母音として現われていたのは次末に位置していたからであって，音素として長母音であったわけではない。一方，例４では，次末音節の / lílihula/の /hu/ が長母音で現われているだけではなく，/ lúha:gí / の/ ha:/ も長母音で現われている。従って， / lúha:gí /の /ha:/ は，次末音節

[1]マテンゴ語の名詞は 19 のクラスに分れていて，すべての名詞がそのいずれかに属する。例の日本語訳につけた（ ）内の数字は，その名詞が属している名詞クラスを表わす。以下同様。名詞クラスについての詳細は第４章「名詞と連体修飾語」を参照のこと。

という環境によって長母音で現われているのではなく，音素としての長母音をもっていることがわかる。ただし，例５と６のように，末尾音節が長母音の場合には，その前にある次末音節の短母音は長母音化しない。

これまでにマテンゴ語の音韻体系について述べているものは Turuka(1983:3)だけであるが，そこではマテンゴ語の母音体系は以下のように立てられている。

/ i /, / ei /, / ɛ /, / a /, / ɔ /, / ou /, / u /

Turuka(1983:4)は，本論文で/ e /, / o /として立てた音素に対して，それぞれ / ei /, / ou /という二重母音を音素として立て，「これらの自由変異音として[e], [o]も聞かれる」と述べている。しかしながら筆者の調査では，これらはほとんどの場合，[e], [o]という単母音で現われた。確かに[ei], [ou] と発音されることもあるが，それは，それらが長母音として現われる環境に位置したときに限られており，しかもその場合でも[e:], [o:]との自由変異音である。従って，/ e / と / o / を音素として立て，[ei], [ou]を異音と考えるべきであろう。

また Turuka(1983:6)は，「マテンゴ語における母音の長さは，…（例省略）… 音声的には次末音節の母音が長く発音されるが，語彙対立を示すものではない」として，母音に長短の対立を認めていない。しかし，上に示したような最小対が存在しており，母音に長短の対立があることは明らかである。

語末に位置する i，u は，それぞれ ɛ，ɔと交替が可能である。

7) / kilá:bu /	[kilâ:bu] ～ [kilâ:bɔ]	「明日」
8) / míhu /	[m̂i:hũ] ～ [m̂i:hɔ̃]	「目(6)」
9) / ugwáli /	[uɣwâ:li] ～ [uɣwâ:lɛ]	「練り粥 (14)」
10) / isóli /	[isɔ̂:li] ～ [isɔ̂:lɛ]	「嘘(10)」

マテンゴ語には音素としての鼻母音はないが，鼻音に後続すると鼻母音化する。この鼻母音化は鼻音以外の子音によってさえぎられる。しかしながら / h / と /w，j /は例外で，鼻母音化をさえぎらない。

11) / makútu /	[mãkû:tu]	「耳 pl. (6)」
12) / máhupa /	[mã́hũ:pa]	「骨 pl.(6)」
cf. 12') / líhupa /	[líhu:pa]	「骨 sg.(5)」

13) / mjalɔbahîni /	[mjãlobahî:ñi]	「木の一種 pl.(4)」
14) / mwána /	[mwẫ:nã]	「子供 sg.(1)」
cf. 14') / bána /	[bâ:nã]	「子供 pl.(2)」

3.1.2. 子音と半母音

マテンゴ語の子音と半母音の体系は以下のとおりである。

		両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	(vl)	p	t		k	
	(vd)	b			g	
摩擦音	(vl)		s			h
破擦音	(vd)			dʒ		
側面接近音			l			
鼻音		m	n	ɲ	ŋ	
半母音		w		j		

体系的には側面接近音/ l /と破擦音/ dʒ /が，それぞれ / t /, / s / に対立する有声音であると考えられる。これらは鼻音に先行される環境では，それぞれ異音[d], [dz]で現われる。

p :	-péŋg- 「伝統神に祈る」	-húp- 「お祝いをあげる」		
t :	-téŋg- 「束ねる」	-hút- 「引っ張る」		
k :	-kéŋg- 「仲裁する」	-húkan-「手で掘る」	-bék- 「時を告げる」	
b :	-bélɛk- 「産む」	-húb- 「きれいにする」		
g :	-gélɛk- 「重ねる」	-húg- 「漕ぐ」	-bég- 「囲いをする」	
s :	-séŋg- 「建てる」	-hṵs- 「引き抜く」		
h :	-héŋg- 「する」	-kúh-「死ぬ」		
dʒ :	-dʒéŋg- 「油を作る」	-búdʒ-「帰る」		
l :	-léŋg- 「ねらう」	-hṵl- 「脱ぐ」		
m :	méŋga 「虫の一種」	-húm-「～から来る」		
n :	néŋga 「私」	-hún- 「吐き出す」		
ɲ :	-ɲélabu-「滑らせる」	-húɲ- 「こねる」	-ɲa̱h-「乾かす」	
ŋ :	-ŋéŋɛn- 「取り除く」	-húŋgul-	-ŋa̱h- 「困らせる」	

3.1.2.1. 閉鎖音

無声閉鎖音に有気音と無気音の対立はない。語頭では常に有気音で現われる。語頭以外の環境では通常は無気音で現われるが，その語が強調される場合には有気音で現われる。

/ p / : [pʰ], [p]

/ pamíhu /	[pʰamîi:hũ]			「顔(16)」
/ lipéla /	[lipê:la]	～	[lipʰê:la]	「霧雨(5)」
/ lubópu /	[lubô:pu]	～	[lubô:pʰu]	「組木の横棒(11)」

/ t / : [tʰ] , [t]

/ ta:á /	[tʰǎ:a]			「カンテラ(9)」
/ mátoli /	[mǎto:li]	～	[mǎtʰo:li]	「つき臼(6)」
/ lihátu /	[lihâ:tu]	～	[lihâ:tʰu]	「パイソン(5)」

/ k / : [kʰ] , [k]

/ kibéga /	[kʰibê:ɣa]			「土鍋(7)」
/ mákili /	[mǎki:li]	～	[mǎkʰi:li]	「力(5)」
/ mátɛku /	[mǎtɛ:ku]	～	[mǎtʰɛ:kʰu]	「お尻(6)」

/ b /[2] : [b], [ɓ]

自由変異として [ɓ] も聞かれる。

/ bánlu /	[bâ:ndu]	～	[ɓâ:ndu]	「人々 (2)」
/ mbénla /	[mbê:nda]	～	[mɓê:nda]	「樹皮の袋(9)」
/ libóŋgu /	[libô:ŋgu]	～	[liɓô:ŋgu]	「青虫(5)」
/ limbɛ́lɛle /	[limbɛ́lɛ:lɛ]	～	[limɓɛ́lɛ:lɛ]	「羊(5)」
/ málɔbi /	[mǎlɔ:bi]	～	[mǎlɔ:ɓi]	「声(8)」
/ máhombí /	[mǎhŏ:mbi]	～	[mǎhŏ:mɓi]	「卵(6)」

---

[2] / b /と / g / はそれぞれ対立した音素であるが，本論文のデータとなっているマテンゴ・ハイランドで話されているマテンゴ語と，ンパパ地域で話されているマテンゴ語では，これらが交替する場合がある。

マテンゴ・ハイランド	ンパパ地域	
-hógol-	-hóbol-	「水から出す」
-háguk-	-hábuk-	「落ちる」
úluba	úluga	「ひび割れ」

/ g / ：[g]，[ɣ]

鼻音に先行される場合には[g]，それ以外の位置では [ɣ]で実現される。

/ ŋgɔ́lɛkɔ /	[ⁿgɔ́lɛ:kɔ]	「鍵(9)」
/ -húŋgula / [3]	[hu:ŋgu:la]	「拭く」
/ ípoŋga /	[ípo:ŋga]	「かみそり(8)」
/ -gɔ́lɔka /	[ɣɔlɔ:ka]	「寝る」
/ -húguta /	[huɣu:ta]	「ふいごを吹く」
/ ípaga /	[ípa:ɣa]	「ひづめ(8)」

3.1.2.2. 摩擦音

摩擦音には有声と無声の対立はなく，常に無声で現われる。

/ s / ：[s]

/ sakáka /	[sakâ:ka]	「確信(9)」
/ lúsɛmbá /	[lúsɛ̃:mba]	「皮膚(11)」
/ liŋgɛŋgɛsá /	[liŋgɛ:ŋgɛ́:sa]	「鈴(5)」

/ h / ：[h]，[—]

半母音に後続される場合を除けば，語幹頭では必ず [h]で現われる。語幹頭以外の場合と半母音に後続される場合には発音されないことが多い。

/ -háguka /	[haɣu:ka]			「落ちる」
/ li-hómbi /	[lihó:mbi]			「卵 sg.(5)」
/ -hwáta /	[hwa:ta]	～	[wa:ta]	「着る」
/ -báha /	[ba:ha]	～	[ba:a]	「数える」
/ mi-táhu /	[mĩtâ:hu]	～	[mĩtâ:u]	「困難(6)」

3.1.2.3. 破擦音

/ dʒ / ：[dʒ]，[dz]

鼻子音に先行される環境では [dz] （つまり[ndz] ），として実現される。

---

[3] 動詞語幹＋基本語尾 -a の形である。音声表記で例をあげる場合と音節構造に関する例の場合には，動詞の例にはこの形を用いる。

/ mí- dʒeŋgu /	[mḭ́dʒe:ŋgu]	「運搬用の棒 pl.(4)」
/ Ń- dʒeŋgu /	[ŋ̍dze:ŋgu]	「運搬用の棒 sg.(3)」
/ gu- dʒalika/	[gudʒáli:ka]	「君は練り粥を作る」
/ N- dʒalika/	[ŋ̍dzáli:ka]	「君達は練り粥を作る」

3.1.2.4. 鼻音

/ m / : [m]

/ málelu /	[mā́le:lu]	「喪(6)」
/ -hólamɔla /	[hɔlamõ:la]	「引き抜く」
/ lúhomu /	[lúho:mũ]	「物語(11)」

/ n / : [n]

/ -nímania /	[nĩmãnĩ:ã]	「遠くにやる」
/ -kánakila /	[kanãki:la]	「禁ずる」
/ -pálagana /	[palaɣa:nã]	「火をかき回す」

/ ɲ / : [ɲ]

/ -ɲága /	[ɲã:ɣa]	「掻く」
/ -kíɲila /	[kiɲĩ:la]	「ウィンクする」
/ -máɲa /	[mã:ɲã]	「知る」

硬口蓋鼻子音 / ɲ / は，/ n / に半母音が後続する子音結合 [nj]とは区別される。それぞれに続く母音が長母音の場合，前者はひとつの母音が長く発音されるが，後者は２重母音のように発音される。

/ -ɲáka /	[ɲã:ka]	「燃える」
/ -njáka/	[niʲãka]	「軽蔑する」

/ ŋ / : [ŋ]

/ -ŋámuta /	[ŋãmũ:ta]	「寝言を言う」
/ -káŋanla /	[kaŋã:nda]	「卵をかえす」
/ -ŋéŋɛna /	[ŋẽŋẽ:nã]	「不要な部分を切取る」

3.1.2.5. 側面接近音

/ l / : [l], [d]

鼻子音に先行される環境では [d] (つまり[nd]), として実現される。

/ mí- lɔmɔ /	[mḭ́lɔ:mɔ̃]	「口 pl., 唇(4)」
/ Ń- lɔmɔ /	[ṇ́dɔ:mɔ̃]	「口 sg.(3)」
/ gu- lapulila/	[ɣulápuli:la]	「君は手で水をまく」
/ N- lapulila/	[ṇdápuli:la]	「君達は手で水をまく」

3.1.2.6. 半母音

常に他の子音と結合して現われる。

/ w / : [w], [u]

この音に続く母音が / i / で, かつ, その母音が長母音で実現される環境にある場合 (3.2.2.参照) には, / w / は母音 [u]のように実現されることがある。

/ kwísu /	[kwí:su]	～	[kuísu]	「おととい」
/ mwíkikɔkɔ/	[mwḭ́kikɔ:kɔ]			「貯蔵庫の中(18)」
/ ugwémbi /	[uɣwê:mbi]			「地ビール(14)」
/ -kwɛ́ba/	[kwɛ:ba]			「髪をとかす」
/ kwálɛ /	[kwâ:lɛ]			「たぶん」
/ bwódʒo /	[bwô:dʒo]			「鋭い, うそつき」
/ bwóga /	[bwɔ̂:ɣa]			「きのこ(9)」

/ j / : [j], [i]

/ j / に続く母音が長母音で実現される環境にある場合 (3.2.2.参照) には, / j / は母音 [i]のように実現されることがある。この傾向は, 特に / j / に先行する子音が / n /のときに強い。逆に, / j / に先行する子音が / p /の場合と, 後続する母音が/ u / の場合には, / j / が[i]と実現されることはない。/ j / が母音 [i]と実現される場合には, 続く母音との間にわたり音として[j]が入る。

/ -njɛ́mba /	[njɛ̃:mba]	～	[nĩʲɛ̃mba]	「巻く」
/ -njáhi /	[njâ:hĩ]	～	[nḭ́ʲãhĩ]	「よい」

/ -njóŋga /	[njɔ̃:ŋga]	～	[nĩʲɔ̃ŋga]	「ねじる」
/ mjáka /	[mjâ:ka]	～	[mĩʲãka]	「年(3)」
/ ljóŋgu /	[lĩʲoŋgu]	～	[ljô:ŋgu]	「カボチャの実(5)」
/ -pjópa /	[pjo:pa]			「熱くなる」
/ luhjákanli /	[luhjáka:ndi]			「草の名前(11)」
/ ljuŋgúla /	[lju:ŋgû:la]			「カエル(9)」

3.1.3. 子音結合

子音結合には，子音＋半母音，鼻子音＋口腔子音，鼻子音＋口腔子音＋半母音，がある。具体的な組み合わせを以下に挙げる（Vは母音，Cは子音，Sは半母音，Nは鼻音を表わす。以下同様)。

3.1.3.1. 子音＋半母音

3.1.3.1.1. C ＋ / w /

pw	:	/-pwágul-/	「言う」	cf. /-págul-/	「罪を犯す」
tw	:	/-twéŋg-/	「いびきをかく」	cf. /-tɛŋg-/	「束ねる」
kw	:	/-kwáb-/	「這う」	cf. /-káb-/	「乳をしぼる」
bw	:	/-bwét-/	「キャンキャン鳴く」	cf./-bél-/	「沸く」
gw	:	/-bégw-/	「熟す」	cf. /-bég-/	「囲いをする」
mw	:	/ mwéŋga/	「君たち」	cf. /méŋga/	「虫の一種」
nw	:	/-nwéŋg-/	「わめく」	cf. /néŋga/	「私」
ɲw	:	/ ɲwíta/	「喉の乾き(9)」	cf. /-ɲík-/	「川が流れる」
ŋw	:	/-ŋwátalil-/	「(カラスが) 鳴く」	cf. /-ŋálik-/	「星がまばたく」
sw	:	/-swék-/	「にじみ出る」	cf./-sékan-/	「細かく切る」
hw	:	/-hwát-/	「着る」	cf./-hát-/	「脂がのる」
dʒw	:	/-dʒwáb-/	「剥ぎ取る」	cf. /-dʒáb-/	「火にあたる」
lw	:	/-lwál-/	「苦しい」	cf. /-lál-/	「すり切れる」

3.1.3.1.2. C ＋ / j /

Cは，/ p /，/ h /，/ n /に限られる。それ以外にもCjVの形の音節は現われるが，それらは母音が形態素の境界で重なって半母音化したものである（3.3.1.参照)。

pj	:	/-pjóg-/	「もてなす」	cf. /-póg-/	「呪をかける」
hj	:	/-hjóm-/	「悲しむ」	cf. /-hóm-/	「矢で射る」
nj	:	/-njóŋg-/	「ねじる」	cf. / nóŋgɔ/	「針ねずみ(9)」

cf.	mjau	<	mí-áu	「アカシア(4)」
	-lja	<	lé-a	「食べる」

/ w /と/ j / は，上に示したような他の子音との子音結合でのみ現われる。また，3.1.2.6.で述べたように，［ u ］と［ i ］で実現されている例もあることから，これらはそれぞれ，母音 / u /，/ i / であるとも考えられる。しかしながら本論文ではこれらを半母音の音素として立てた。これは以下のような根拠による。

まず母音の連続について考えてみる。マテンゴ語では，子音 / h /が省略されている場合を除いて，形態素内で母音が連続する例は見られない。従って，C+/ w /と C+/ j / を子音結合ではなく CV であるとするなら，/pjo/のような音節は CVV ということになり，ある母音に限って母音連続を認めなければならなくなる。

次に，hSV という音節について，/ h /は半母音に後続される場合は発音されないことが多いことはすでに述べたとおりであるが，/ w / および / j / に先行する / h / が発音されない場合，以下のようになる。

15) /guhwá:tɛ/	[ɣuwá:tɛ]	cf. * [ɣuua:tɛ]	「服を着なさい」
16) /guhjé:kɛ /	[ɣujé:kɛ]	cf. * [ɣuie:kɛ]	「蓋をしなさい」

上記の例が示すとおり，/ h / が省略された後に残るのは半母音と母音であって，母音の連続ではない。

以上のことから，/ w / と / j / を半母音として認めたが，これについては，後述の「短母音化」においてもう一度扱うことにする。

3.1.3.2. 鼻子音＋口腔子音

/ ɲ / 以外の鼻子音と，その鼻子音と同じ調音点の有声閉鎖音 / b, g /，側面接近音 / l /，破擦音 / dʒ / の結合である。側面接近音と破擦音の場合は，それぞれ［ d ］，［dz］という異音で現われる。/ dʒ / と同じ調音点の鼻音は/ ɲ / だが，異音[dz]と同じ調音点の鼻音 / n / と結合する。

mb	:	/-lɔ́mb-/	「買う」	cf. /-lɔ́b-/	「魚を捕る」
ŋg	:	/-lɔ́ŋg-/	「川が流れる」	cf. /-lɔ́g/	「呪の言葉をはく」
ndz	:	/-húndʒ-/	「枝をよける」	cf./-búdʒ-/	「帰る」
nd	:	/-húnl-/	「(肉が) 悪くなる」	cf./-hṵ́l-/	「脱ぐ」

もし mb, ŋg, ndz, nd を前鼻音化子音の音素として立てれば,「鼻子音＋口腔子音」という子音結合は必要なくなる。しかしながら，本論文では，これらを子音結合として扱っている。この根拠について説明する。

まず，mb, ŋg, ndz, nd の音の直前にポーズがある場合を考えてみる。これは先に述べたとおり，前鼻音化子音のように聞こえる，つまりもっとも前鼻音化子音と考えられる場合である。mb, ŋg, ndz, nd が語頭にくるのは，名詞では９，10 クラスのクラス接頭辞 n-，動詞では１人称単数のＳ辞 n-が語根に付加され，続く子音と結合した場合のみである。従って，鼻音とそれに続く閉鎖音の間には形態素の境界がある。

次にmb, ŋg, ndz, nd が語中にくる場合である。3.1.2.の子音体系表にあげた子音には現われる位置の制限はないが，mb, ŋg, ndz, nd は動詞語根頭には現われない。従って，もしこれらを前鼻音化子音として音素に立てるならば，一部の子音に対して現われる位置に制限を設ける必要がでてくる。

これらの理由に加えて，積極的にこれらを音素として立てる理由がないことから，本論文ではmb, ŋg, ndz, nd を音素として立てず，ふたつの子音の結合として扱うことにした。

3.1.3.3. 鼻子音＋口腔子音＋半母音

3.1.3.2.で示した「鼻子音＋口腔子音」に / w /が結合した場合である。半母音は/ w /に限られる。

mbw	:	/ dʒimbwá /	「犬(9/10)」	cf. / lúsembá /	「皮(11)」
ŋgw	:	/ maŋgwínila /	「しわ(6)」	cf. / kíhiŋgini /	「かかと(7)」
ndzw	:	/ kindʒwéndʒi /	「ひじ(7)」	cf. / kindʒéndʒɛ /	「斧(7)」
ndw	:	/ lipúnlwa /	「ハイエナ(5)」	cf. / libumúnla /	「パン(5)」

3.2. 音節

3.2.1. 音節構造

音節は，開音節で，V，N，(N)C(S)V，と構成される。以下それぞれの形の音節について，例をあげながら説明する。単語内のピリオド（ . ） は音節の境界を表わす。

3.2.1.1. V

短母音に限られる。

/ isɔ́li /	i.sɔ.li	「嘘(9)」
/ umútu /	u. mu. tu	「頭(3)」
/-pémbɛa /	pɛ. mbɛ. a	「あやす」

3.2.1.2. N

ɲ以外の鼻音は，後ろに母音を伴なわずに単独で音節として立つことができる（音節主音的鼻音)。子音結合の場合（3.1.3.2.参照）とは異なり，独立した声調を有する。ただし，これは音節主音的鼻音が語頭に位置した場合のみで，語中に位置する場合には子音結合との音声的な差はなくなる。

音節主音的鼻音は，後続する子音が/ h /以外の場合を除いて，後続する子音と同じ調音点で現われる。後続する子音が/ h /の場合には ŋで現われる。音節主音的鼻音の m，n，ŋ が現われる環境は相補分布しており，これらはひとつの音素 /N/の異音であると考えられる。また，この/N/は，形態素 mu-の異形態 [4]であり，１音節の形態素としてのみ現われる。

/ Ḿpetá /	m. pɛ. ta	「けもの道(3)」
/ Ḿbɛli /	m. bɛ. li	「年上の同性のきょうだい(1)」
/ Ńtɛlá /	n. tɛ.la	「薬(3)」
/ Nsípu /	n. si. pu	「くしゃみ(3)」
/ Ńkɔ́ha /	ŋ. kɔ. ha	「槍(3)」
/ Ńhá:hani /	ŋ. ha:. ha. ni	「ヘチマ(3)」

[4] mu-は，１クラス，３クラス，18 クラスの名詞クラス接頭辞，また２人称複数の主語に呼応する主語辞，２人称複数もしくは３人称単数の目的語に呼応する目的語辞である。それぞれの異形態が現われる具体的な環境は，名詞クラス接頭辞については４章 (4.1.1.)，主語辞および目的語辞については５章 (5.2.1.，5.2.2.) で述べる。

3.2.1.3. (N)C(S)V

3.2.1.3.1. CV

もっとも一般的な形である。CとVの組み合わせ，現われる位置などの制限はない。

/ kíhɔtú /	ki. hɔ. tu	「穴(7)」
/ sobí /	so. bi	「採血用の角(9)」
/ mápo:lela /	ma. po:. le. la	「臼歯(6)」

3.2.1.3.2. NCV

Cは有声閉鎖音 / b, g /，側面接近音 / l /，破擦音 / dʒ / に限られる。Nは後続するCと同調音点の鼻音である。この構造の音節は，動詞語根頭には現われない。

/ másɔmba/	ma. sɔ. mba	「ひまわり pl.(6)」
/ kíloŋgu /	ki. lo. ŋgu	「シコクビエの粉(7)」
/ lítɔndʒi /	li. tɔ. ndzi	「綿(5)」
/ litunlá /	li. tu. nda	「墓 sg. (5)」

この構造の音節の直前にポーズがある場合（文頭を含む。以下同様）[5]，鼻音の部分が弱まり，前鼻音化子音のように実現する。

/ mbópo /	[^{m}bô:po]	「鎌 sg. (9)」
cf. / limbôha /	[li:mbô:ha]	「木の実の種類 sg.(5)」
/ ŋgɔ́kɔtu /	[^{ŋ}gɔ́kɔ:tu]	「太鼓の中をくりぬく道具 sg. (9)」
cf. / kiŋgɔlɔ́gɔ /	[kiŋgɔlɔ̂:gɔ]	「トウモロコシの芯 sg. (7)」
/ ndʒégaségi /	[^{n}dzégasê:gi]	「小豆 sg. (9)」
cf. / lindʒegí /	[li:ndzé:gi]	「カニ sg. (5)」
/ nlɔ́tu /	[^{n}dɔ̂:tu]	「夢 sg. (9)」
cf. / linlɔ́tu /	[li:ndô:tu]	「水滴 sg. (5)」

[5] 鼻音部分が弱まる例として，NCV音節が語頭にくる単語を挙げたが，これらの鼻音部分が弱まるのは，文頭に位置する場合か，あるいは直前にポーズがある場合である。従って，同じ句に属する動詞や前置詞などに先行される場合には，語頭のNCは語中に現われた場合と同様の現われ方になる。

3.2.1.3.3. CSV

S が/ w /の音節の場合には現われる位置に制限はないが，S が/ j /の音節は，語頭もしくは語幹頭にしか現われない。

/ mwɔ́tɔ /	mwɔ.tɔ	「火，熱(3)」
/ liŋwiná /	li. ŋwi. na	「ワニ sg. (5)」
/ -súkwa /	su. kwa	「飽きる」
/ -hjɛ́la /	hjɛ. la	「恥ずかしがる」
/ -pjɔ́pa /	pjo. pa	「熱くなる」

3.2.1.3.4. NCSV

Cは有声閉鎖音 / b, g /，側面接近音 / l /，破擦音 / dʒ / に限られる。Nは後続するCと同調音点の鼻音である。Sは/ w /に限られる。この音節が動詞語根頭に現われることはない。

/ dʒimbwá /	dʒi.mbwa	「犬(9)」
/ ŋgwápa /	ŋgwa. pa	「脇の下(9)」
/ -hɛ́ŋgwa /	hɛ. ŋgwa	「水が澄む」
/ kindʒwéndʒi /	ki. ndzwɛ. ndzi	「ひじ(7)」
/ dʒinlwíki /	dʒi.ndwi.ki	「ダンスの役割名の一種(9)」

3.2.2. 音節とモーラ

マテンゴ語においては，音節とは別に「モーラ」という単位を考える必要がある[6]。これは声調（3.4.参照）を考える上で特に重要である。以下の例では，○を１モーラとして表わした。広く間隔が空いたところが音節の境界である。

例 17～19 を見ると，２モーラで現われているのは，音素としての長母音をもつ音節と次末に位置して長母音化する音節，つまり長母音をもつ音節である。それ以外の音節は，１モーラで現われている。音節主音的鼻音も１モーラである。

17) / líbagu alé:/	○	○	○	○	○○	「この斧(5)」
[líbaɣu alê:]	li	ba	gu	a	le:	

[6] 「音節」と「モーラ」の両方の単位を認める必要性については，この節の最後に述べる。

18) / Ńpɛtupɛtú /	○	○	○	○○	○		「砂ノミ(3)」
[ṃ̩pɛtupɛ̌:tu]	m	pɛ	tu	pɛ:	tu		
19) / luhú:lia lumɔ́ /	○	○○	○	○	○○	○	「一本の白髪(11)」
[luhû:lia lŭ:mɔ̃]	lu	hu:	li	a	lu:	mɔ	

さて，上記のような場合の他に，以下の音節は２モーラとして実現される。

① CSV の音節
② NC に先行する音節

20) / likwílila alé:/	○	○○	○	○	○	○○	「このビーズ(5)」
[likwí:lila alê:]	li	kwi:	li	la	a	le:	
21) / lihimbi alé:/	○	○○	○	○	○○		「このヤム芋(5)」
[lihi:mbi alê:]	li	hi:	mbi	a	le:		

例 20 の/kwi/ は CSV の音節，例 21 の/hi/ は NC に先行する音節であるが，これらはいずれも母音が長母音化している。つまり，音素としての長母音や次末音節に位置する母音も合わせて，２モーラの音節はすべて「長母音として現われる母音をもつ音節」であると言える。

これらの母音はどのような経緯で長母音化しているのだろうか。①については，母音が半母音化し，その代償として，後ろに続く母音が長母音化していると考えられる。すなわち図２のようになる。μ はモーラ，σ は音節を表わす。

＜図２＞

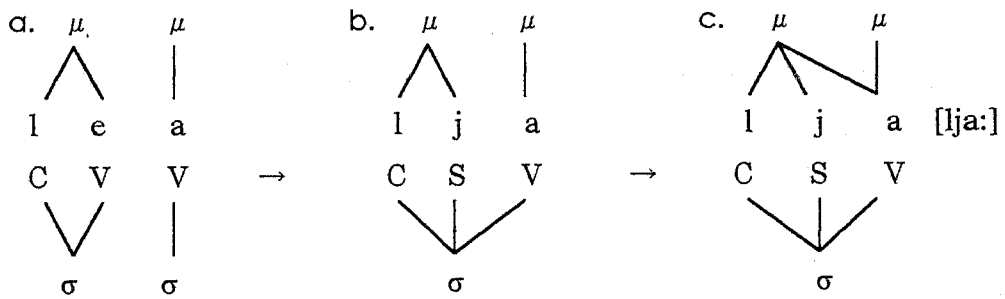


図２は母音が形態素の境界で重なって半母音化した例であるが，CS という子音結合の場合も同様に，図２の b → c という長母音化が起こっていると思われる。

②の NC に先行する母音の長母音化については，Hyman（1992:256）がガンダ語[7]に見られる同様の現象について図３のように説明している。

＜図３＞

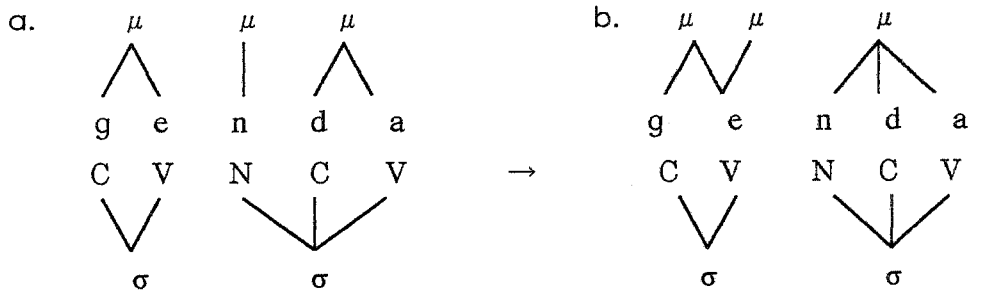


図３a が示しているように，NC の N は，それが音節主音的鼻音でなくてもモーラを持っていると考えられる。NC が母音に先行される場合には，N が持っていたモーラは先行する母音に移行，N 自体は後ろに位置するモーラに合流する，という解釈である。この解釈はマテンゴ語の場合にも有効であると思われる。

さて Hyman（1992:256）は，図３の a → b という変化について，次の２とおりの可能性を認めている。

I）もともと N が持っていたモーラを手放して「空き」にしたために，先行する母音がそのモーラを引き取った

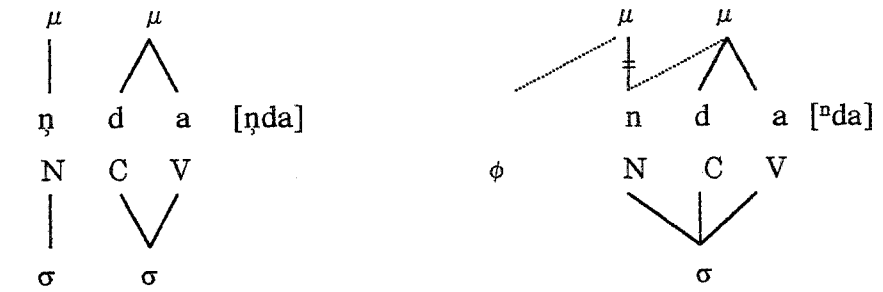
II）先行する母音が N のモーラに拡張したために N はモーラを手放した

これらの可能性についてマテンゴ語の場合を検討する前に，NC がポーズの直後に位置した場合のモーラ関係を見てみよう。3.2.1.2.で述べたとおり，音節主音的鼻音は，語中に位置する場合には「鼻子音＋子音」という子音結合の場合との音声的な差がなくなる。音

[7] ガンダ(Ganda)語はバンツー諸語のひとつで，ウガンダ，タンザニア北西部で話されている。NC に先行する母音の長母音化については，Ngunga（1997:42）もヤオ(Yao)語について同じ現象を報告している。ヤオ語はバンツー諸語のひとつで，タンザニア南部，マラウィ南部，モザンビーク北西部で話されている。

節主音的鼻音とそうでない鼻子音との間に音声的な現われの違いが出てくるのは，これらがポーズの直後に位置した場合である。その場合のNのモーラがどのような現われ方をするのかを表わしたのが図４である。

＜図４＞ a. Nが音節主音的鼻音の場合　　b. Nが音節主音的鼻音ではない場合



ṇ́dabu「服を作る皮(3)」　　ndába「理由(9)」

図４aのようにNが音節主音的鼻音の場合には，１音節が１モーラずつ持ち，Nが持つモーラはそのままNに保たれる。一方，図４bのように子音結合の場合のNは，持っていたモーラを手放し，後ろのCVのモーラに合流する。手放されたモーラは新たに繋がる音がないため，脱落する。

図４bが示すように，マテンゴ語の場合には，先行する母音がなくてもNがモーラを手放す場合がある。従って，IIの「先行する母音がNのモーラに拡張したためにNはモーラを手放すことになった」という解釈は成り立たない。ただし，Iの「Nが持っていたモーラを手放したために，先行する母音がそのモーラを引き取った」という解釈だけでは，図４aのようにNがモーラを手放さない場合について，なぜ手放さないのかという理由の説明が不足している。マテンゴ語の場合には，モーラを維持しているのが図４aのように音節として立つことのできるNの場合だけで，子音結合のNや語中に現われた音節主音的鼻音が自らのモーラを手放していることから，次のように考えられる。

「音節として立つことができない単位は，持っているモーラを手放す傾向がある」

以上，２モーラで現われる音節は長母音をもつ音節であることと，長母音化について論じてきた。長母音化をまとめると以下のようになる。

「CSに後続する母音とNCに先行する母音は長母音化し，２モーラで現われる」

しかしながら，これら長母音が２モーラで現われるのは，その音節が語末[8]から３音節めまでに位置する場合に限られる。長母音を含む音節がそれよりも前に位置する場合，長母音は１モーラ，つまり短母音に中和されてしまう。

22)	/ -bomba /	[bo:mba]	「土でつくる」
22')	/ -bombola /	[bo:mbo:la]	「取り壊す」
22")	/ -bombulela /	[bombule:la]	「～の代理で取り壊す」
23)	/ -dʒo:ba /	[dʒo:ba]	「剥ぐ」
23')	/ -dʒo:bela /	[dʒo:be:la]	「～の代理で剥ぐ」
23")	/ -dʒo:batoka /	[dʒobato:ka]	「剥がれる」

例 22 は NC に先行して長母音化している母音をもつ動詞，例 23 は音素としての長母音をもつ動詞で，それぞれの動詞に派生辞を付けたのが，22'，22" と 23'，23"である。22' と 23'では，長母音が語末から３音節めに位置しているので長母音を保っている。しかし 22"と 23"のように，さらに接辞が加わって，長母音が語末から３音節めよりも前に位置することになると，これらの長母音は短母音になってしまう。この短母音化は次のようにまとめられる。

「語末から３音節めよりも前に位置する長母音は短母音化する」

長母音はあくまでもひとつの母音であって，同じ２モーラであっても，２つの母音の連続とは分けて考える必要がある。マテンゴ語には形態素内で母音が連続する例はないので，形態素の境界で母音が重なる例と比べてみよう。

24) naadʒáŋgatĩlɛ　　「私は彼らを手伝った」

na	- a	- dʒáŋgatĩlɛ	
「私」	「彼ら」	「手伝った」	

例 24 が示すように，母音の連続の場合には，後ろに３音節以上続いても，２母音のまま，

[8] 「語末」とはその単語の末である。従って，後続語があっても語末の位置は変わらない。ポーズの位置を表わす「末尾」（P27 参照）とは区別する。

つまり２モーラが保たれる。

さて，半母音を音素として立てた根拠を 3.1.3.1.2.で述べたが，次にあげる例 25 の / twe / や 例 26 の/ hjɛ/ が，CSV なのか，あるいは CVV なのか，という問題について，今度は短母音化の規則から考えてみる。例 25'と 26' は，それぞれ例 25，26 と同じ語根に派生辞をつけ，/twe/ と/ hjɛ /を語末から３音節以上離れたところに位置させた例である。

25) / -twéleka /	[tʰwe:le:ka]～[tʰuele:ka]	「一杯になる」
26) / -hjétuka /	[hjɛ:tu:ka]～[hiɛtu:ka]	「またぐ」
25') / -twélakela /	[tʰwelake:la]	「一杯にする」
26') / -hjétukila /	[hjɛtuki:la]	「～の代理でまたぐ」

もし音節 /twe/，/ hjɛ/ の母音が長母音ではなく２つの母音の連続であるなら，後に３音節以上続いても，例 24 の場合のように２モーラに保たれるはずである。しかしながら，25'と 26'の例を見ると/twe/，/ hjɛ/ は１モーラになっている。このことから考えても /twe/，/ hjɛ/ は CVV ではなく，CSV であると考えるのが妥当であると言える。

マテンゴ語では「モーラ」という単位が機能することはこれまで述べてきたとおりであるが，上記の短母音化の規則では「音節」という単位が係わってくる。

27) / lindímbu / [li:ndì:mbu]	li.ndí.mbu	○○ ●○ ○	「タケノコ sg.(5)」
28) / lundzéndzɛmá / [lundzê:ndzɛ̌:mã]	lu.ndzɛ.ndzɛ.ma	○ ●○ ○● ○	「蚊 sg(11)」

例 27，28 が示すように，長母音が語末から３モーラめより前に位置する場合であっても，それが音節として語末から３音節めに位置していれば，長母音のまま保たれる。従って，この言語では，「モーラ」という単位だけではなく，「音節」と「モーラ」の両方の単位が機能していると言える。

3.3. 音韻規則

いくつかの音韻規則については，音素と異音，または長母音化に関連して，すでに説明をしてきたが，ここではそれ以外の規則，主に形態素の境界で起こる規則について述べる。

3.3.1. 母音縮約

形態素の結合によって母音が重なる場合[9]，母音には以下のような縮約が起こる。

● 前の母音が / i / の場合

前の母音は半母音化する。以下は名詞クラス接頭辞と名詞語幹が結合した場合の例である。hi-，li-，mi-は，それぞれ，８クラス，５クラス，４クラスの名詞クラス接頭辞で，後ろに続くのが名詞語幹である。

i + ɛ	→ jɛ	hí- + -ɛmbɛmbi	→	[hjɛ̂:bɛ̌:mbi]	「みぞおち(8)」
i + u	→ ju	li- + -uŋgula	→	[lju:ŋgû:la]	「小カエル sg. (5)」
i + o	→ jo	li- + oŋgu	→	[ljô:ŋgu]	「楽器の名前 sg. (5)」
i + ɔ	→ jɔ	mí- + ɔdʒɔ	→	[mjɔ̂:dʒɔ]	「胸 pl. (4)」
i + a	→ ja	li- + -akapoŋgu	→	[ljakápo:ŋgu]	「はば鷹 (5)」

ただし，後ろの母音が後舌母音以外で，かつ，その母音が長く発音される環境にあれば，間にわたり音として[j]が入るだけの場合もある。

mí- + -éhi →	[mjɛ̂:hĩ] ～	[mí^{j}ɛ̃hĩ]	「月(4)」
mí- + -áka →	[mjâ:kã] ～	[mí^{j}ãka]	「年(4)」

また，/ i / の直前の子音が/ s /，/ dʒ / [10] の場合には，半母音化はせず，後ろの母音に融合される。

---

[9] ただし，結合される形態素が目的語辞（5.2.2.参照）および動詞語尾（5.5.3.参照）の場合はこの限りではなく，異なった振る舞いを見せる。これらについては第５章で詳しく述べる。

[10] 母音/i/で終わる接辞が，hi-，li-，ki-，si-，dʒi-，mi- に限られているため，半母音化しない例は子音が/s/の場合と/dʒ/の場合しか確認できないが，Cj という連続を作らない子音には，他にも /t/，/g/，/ɲ/，/ŋ/ がある。また，接辞 ki-の場合には，後ろに母音が続くと，異形態の si-で現われる。

sí- + ọbí → [só:bi] 「爪(7)」
cf. hí- + obí → [hjó:bi] 「爪(8)」

sí- + ɛpú → [sɛ́:pu] 「ふるい(7)」
cf. hí- + ɛpú → [hjɛ́:pu] 「ふるい(8)」

dʒi- + ómɛ → [dʒô:mɛ] 「大切な～(9)」
cf. li- + ómɛ → [ljô:mɛ] 「大切な～(11)」

dʒi- + áŋgu → [dʒâ:ŋgu] 「私のもの (9)」
cf. li- + áŋgu→ [ljâ:ŋgu] 「私のもの (11)」

● 前の母音が / u / の場合

前の母音は半母音化する。

u + i	→ wi	mú- + -íhi	→	[mwî:hĩ]	「けちな人 sg. (1)」
u + ɛ	→ wɛ	lú- + -ɛ́mbɛ	→	[lwɛ̂:mbɛ]	「かみそり sg.(11)」
u + a	→ wa	mú- + -ána	→	[mwâ:nã]	「子供 sg. (1)」
u + ɔ	→ wɔ	gú + -ɔ́ha	→	[ɣwɔ̂:ha]	「それ(3)全体」

● 前の母音が / a / の場合

前の母音は後ろの母音に融合される。

a + i	→ i	má- + -íhu	→	[mî:hũ]	「目 pl. (6)」
a + ɛ	→ ɛ	bá- + -ɛ́nɛ	→	[bɛ̂:nɛ̃]	「持ち主 pl. (2)」
a + u	→ u	má- + -uŋgúla	→	[mũ:ŋgû:la]	「小さいカエル pl. (6)」
a + o	→ o	má- + -óŋgu	→	[mõ:ŋgu]	「楽器の種類(6)」
a + ɔ	→ ɔ	bá- + -ɔ́ha	→	[bɔ̂:ha]	「彼らみんな(2)」

3.3.2. 母音調和と母音挿入

マテンゴ語の母音には，舌の高さによる母音調和が見られる。動詞語尾を除けば，語中に半狭母音（ eおよび o ）と半広母音（ ɛおよび ɔ） とが共起することはない。以下の例 29 から 34 は，動詞の派生辞 -ul- と -il- が動詞語根と母音調和を起こす例である。そ

れぞれの派生形についての詳細は第5章「動詞」の5.4.を参照されたい。

-ul- : 他動詞形派生辞

29) -hib - ul- → -hibul- 「栓を開ける」
30) -hop - ul- → -hopol- 「引き抜く」
31) -bɔp - ul- → -bɔpɔl- 「ほどく」

-il- : 適用形派生辞

32) -hut - il- → -hulit- 「かきよせる」
33) -dʒob - il- → -dʒobel- 「雨をよける」
34) -dʒɔs - il- → -dʒɔsɛl- 「～を使って焼く」

マテンゴ語では，名詞クラス接頭辞およびそれに準ずるもの[11]と目的語辞[12]の前に別の接辞が付加される場合，その境界に母音が挿入される。挿入されるのは，境界の直後に位置する音節（つまり名詞クラス接頭辞，目的語辞）の母音である。この母音の挿入は，文法的にも意味的にも影響を及ぼすものではない。この母音を「挿入母音」と呼び，挿入母音が挿入される現象を「母音挿入」と呼ぶことにする。

例35と37は場所クラスの名詞クラス接頭辞（4.1.1.参照）を別の名詞に付加した場合の例，例36は7クラスの名詞クラス接頭辞を/ma/ではじまる民族名につけた場合，例38は「随伴」を表わす前置詞を名詞の前に付けた例である。

35) mu- kibêga → mu- i -kibêga → mwikibêga 「土鍋の中」
mu-（18クラス接頭辞），ki-bêga「土鍋(7)」（7クラス接頭辞－名詞語幹）

36) ki- matɛŋgɔ → ki- a -matɛŋgɔ → si- a -matɛŋgɔ → sámatɛ̌ŋgɔ
ki-（7クラス接頭辞），matɛŋgɔ「マテンゴ（民族名）」 「マテンゴ語」

---

[11] ここで言う「名詞クラス接頭辞に準ずるもの」とは，malawi「マラウィ（国名）」の語頭音節/ma/のように，名詞クラス接頭辞ではないが，音も位置も名詞クラス接頭辞と同じような音節のことである。詳しくは4.1.1.を参照されたい。

[12] 目的語名詞が属しているクラスに呼応して動詞に付加される文法呼応接辞のひとつである。詳しくは5.2.2.で述べる。

37) pa- kípɛpu → pa- i -kípɛpu → pikípɛpu 「寒い時期」
pa-（16 クラス接頭辞），kí-pɛpu「寒さ(7)」（7 クラス接頭辞－名詞語幹）

38) na- lúhombi → na- u -lúhombi → nulúhombi 「土で」
na-（「随伴」前置詞）[13]，lu-hombi「土(11)」（11 クラス接頭辞－名詞語幹）

例 37 と 38 だけを見れば，na-と pa-の母音が後ろの母音と単に同化しているとも考えられる。しかしながら，例 35 では，mu- の母音は単に後ろの母音と同化しているのではなく，mu-の母音も半母音化して残っている。また 例 36 を見ると，接頭辞が ki-ではなくsi-で現われているが，si-で現われるのは，母音の直前に接辞される場合である（4.1.1. 参照)。従って，ki-の後ろには母音があるはずである。35 や 36 のような例から，例 37, 38 についても，接辞のうしろに母音が挿入されていると考えられる。

3.3.3. 鼻音に関する規則

9，10 クラスの名詞クラス接辞 [14]の(i)n- ，あるいは一人称単数の主語辞および目的語辞の n- が子音で始まる形態素に付加される場合には，「鼻子音（音節主音的鼻音は除く）＋子音」という連続になる。この連続が起こる場合には次のような規則がはたらく。

- ◆ 直後に位置する子音が有声音の場合， n は後ろの子音と同調音点化し，後ろの子音は脱落する。
- ◆ 直後に位置する子音が/ h / を除く無声音の場合，n は後続する子音と同音調点化し，子音は有声化する。
- ◆ 直後に位置する子音が/ h / の場合は，それに続く母音を鼻母音化し，n は脱落する。

具体的には以下のような現われ方になる。これは 10 クラスの名詞クラス接頭辞が名詞語幹と結合する場合の例である。比較のために，同じ語幹をもつ 11 クラスの名詞もあげておく。10 クラスは複数形，11 クラスはその対になる単数形の名詞である。ɲで始まる名詞語根の例が 11－10 クラスにはないので，n＋ɲに関しては，「主語接辞 ＋ 動詞」の例をあげることにする。n- は一人称単数形の主語辞，gu- は二人称単数形の主語辞である。

---

[13] 前置詞は，母音挿入や声調の振る舞いから考えると「語」ではなく「接辞」であると思われるが，名詞構成要素ではない。ここでは母音挿入をわかりやすくするため，接辞として名詞の前に付けたが，次章以下の例文では，名詞の構成要素との混乱を避けるために，これを独立させて記することにする。

[14] 9，10 クラスの名詞クラス接辞は，(i)n- 以外に，ϕ- で現われる場合もある。

		10クラス		11クラス	
n + p	→ mb	in- pɛtu → ímbɛtu	cf.	lú-pɛtu	「畑の種類」
n + b	→ m	in- bɛsa → ímɛsa	cf.	lú-bɛsa	「下脚部」
n + t	→ nd	n- tɔ̂ndu → ndɔ̂ndu	cf.	lu-tɔ̂ndu	「腎臓」
n + k	→ ŋg	n- kokela → ŋgókela	cf.	lú-kokela	「雨の流れ道」
n + g	→ ŋ	n- gumba → ŋûmba	cf.	lú-gumba	「親指」
n + s	→ ndz	n- sisi → ndzísi	cf.	lú-sǐsi	「虹」
n + dʒ	→ ɲ	n- dʒoŋgu → ɲôŋgu	cf.	lú-dʒoŋgu	「かぼちゃの種」
n + m̩	→ m	in- muli → ímuli	cf.	lú-muli	「たいまつ」
n + n	→ n	in- nɛlu → ínɛlu	cf.	lú-nɛlu	「肛門」
n + ɲ	→ ɲ	n- ɲaga → ɲaga (1s)	cf.	gu-ɲaga (2s)	「掻く」
n + ŋ	→ ŋ	in- ŋɔ̂ → iŋɔ̂	cf.	lu-ŋɔ̂	「植物の種類」
n + h	→ hṽ	n- hɛgɛla → hɛ̃̃gɛla	cf.	lú-hɛgɛla	「囲い」
n + l	→ n	in- limi → ínimi	cf.	lú-limi	「舌」

「マインホフの法則」では「鼻音の後に有声子音が続く鼻音結合をもった音節に，鼻音結合または鼻音をもった音節が続く場合，最初の音節の鼻音結合は単なる鼻音に変わる」（Meinhof 1913:274，日本語訳は清水 1988 による）とされているが，マテンゴ語の場合には，後ろに続くのが鼻音結合あるいは鼻音をもった音節以外の場合でも，鼻音＋有声子音は単なる鼻音に変わる。

ただし，鼻音が音節主音的鼻音 /N/の場合には，上記の規則は適用されない。音節主音的鼻音の形態素 N-が子音で始まる形態素と結合する場合には，これは直後に位置する子音と同調音点の鼻音として現われるが，その場合に，直後に位置している子音のほうには，上記のような変化は起こらない[15]。例 39～42 は，形態素 N-が子音で始まる形態素に付加される例である。例 39 は 1 クラスの名詞クラス接頭辞，例 40 と 41 は 3 クラスの名詞クラス接頭辞，例 42 は 2 人称複数を表わす主語辞として，それぞれ形態素 N-が用いられた場合である。

39) N- bɛli → m̩̀bɛli 「年上の同性のきょうだい sg.(1)」
cf. 39') á-bɛli 「年上の同性のきょうだい pl.(2)」

[15] その子音が /l/, /dʒ/ の場合には，それぞれ異音[d], [dʒ]で現われるが，これは上記の規則とは別のものである。

40) N- gɔnu → ŋ̍gɔnu 「魚用のわな sg.(3)」
cf. 40') mí-gɔnu 「魚用のわな pl.(4)」

41) N- lahi → ṇdâhi 「竹 sg.(3)」
cf. 41') mi-lâhi 「竹 pl.(4)」

42) N- pala → mpala 「君たちは～が欲しい」
cf. 42') n - pala → mbala 「私は～が欲しい」
42") Ṇ- n - pala → m̩bala 「君たちは私に～して欲しい」
S2pl - O1sg-「欲しい」

3.4. 声調

声調は，高平板調をＨ（ ´），低平板調をＬ（印なし），下降調をＦ（ˆ），上昇調をＲ（ˇ）と表わす。アンダーラインを付けたものは，それが２モーラとして実現されることを表わす。この節では，わかりやすくするために，音素としての長母音だけでなく，音節構造から長母音化したもの（3.2.2.参照）や次末音節など，長母音として現われる母音はすべて長母音の記号(:)を付けて表わすことにする。

3.4.1. 声調の対立

多くのバンツー諸語と同様に，マテンゴ語には声調の対立がある。

43)	hî:ŋgu	(FL)	「首(9)」
43')	hí:ŋgu	(HL)	「頭の当て布(9)」
44)	máhǐ:na	(HRL)	「名前 pl.(6)」
44')	mahî:na	(LFL)	「切り株 pl.(6)」

上記の例が示すように，同じ分節素をもっていても，声調の違いによって異なった単語になる。

また語彙レベルだけではなく，声調の違いで異なる活用形にもなる。

45)	twíle:ma	(HLL)	「我々は耕す（未来）」
45')	twilé:ma	(LHL)	「我々は耕すべきではない（否定提案）」

このようにマテンゴ語では，分節素だけではなく，声調も，文法や語彙を決定する機能を果たしている。

高平板調 Ｈと低平板調Ｌの対立があるが，論文中の例からもわかるとおり，ＨとＬの現われる頻度には明らかに偏りがある。ＨはＬに比べて現われる回数が極端に少ない。この言語では，ＨとＬが声調素として対等に対立しているというよりも，Ｈのみが特定されていて，特定されていないものがすべてＬで現われていると思われる[16]。これらの組み合せで，上昇調Ｒ，下降調Ｆも現われる。

---

[16]本論文では「声調」という用語を用いているが，このような現象から考えると，この言語は「声調言語」というよりは，「アクセント言語」であり，アクセントがＨで現われていると言えよう。

3.4.2. モーラと声調の配列

マテンゴ語では，声調は音節ではなくモーラ単位で有する。

	A：-bág- 「配る」	B：-beŋg- 「追い払う」
46)不定形	kú-dʒi-ba:g-a H L L L 「それを配ること」	kú-dʒi-be:ŋg-a H L L L 「それを追い払うこと」
47)完了過去	twi-dʒí-bag-î:tɛ L H L F L 「我々はそれを配った」	twi-dʒí-bĕ:ŋg-i:tɛ L H R L L 「我々はそれを追い払った」

AとBでは，語根以外は同じ形態素が用いられている。これらの間には，不定形では声調パターンに違いはない。しかしながら，完了過去形にすると上記のように違う声調パターンで現われる。AとBのそれぞれと同じ声調パターンで現われる動詞の例を以下にあげる。

Aグループ		Bグループ	
-la-	「着古す」	-la:-	「見せる」
-lim-	「飼う」	-kwɛ:t-	「ばらまく」
-dʒem-	「立つ」	-dʒe:mb-	「歌う」
-kul-il-	「土をかける」	-ku:l-il-	「縁どりをする」

ふたつのグループを比べてみると，Aグループの動詞語根は，音節構造がCV(C)で短母音のもの，つまりすべて1モーラである。それに対してBグループの動詞語根は，音節構造がCSV(C)，C(S)VNCのもの，および長母音を持つCV(C)のもの，つまりすべて2モーラである。すなわちマテンゴ語の声調パターンは動詞語根のモーラ数によって違いがあるということである。そこで声調をモーラ単位で考えてみよう。

例47の完了過去形の声調をモーラ単位で示すと例47'のようになる。ひとつの丸が1モーラで，○はL，●はHを表わす。間隔を広く空けたところが音節の境界である。

	完了過去形	モーラ単位	音節単位
47')A：	twi-dʒí-bag-î:tɛ	○ ● ○ ●○ ○	L H L F L
B：	twi-dʒí-bĕ:ŋg-i:tɛ	○ ● ○● ○○ ○	L H R L L

音節単位で見ると異なっているように思われたAとBの声調パターンであるが，声調を

モーラ単位で表わした図を見ると，ＡとＢに関係なく，●と○，すなわちＨとＬが，前から同じように並んでいる。つまり，これらは声調パターンに違いがあるわけではなく，モーラ数の違いから，その（各音節への）配分が異なっているにすぎないということがこの図からわかる。Ａの動詞では２つめのＨは４音節めに配分されているが，Ｂの動詞は３音節めが２モーラであるため，そのＨは３音節めの２モーラめに配分されている。この配分の違いが，音節単位の声調を異ならせているのである。従って，２モーラの動詞語根であっても，例 48 のように後ろに３音節以上続いて長母音が短母音化した場合には，Ａとの差がなくなる。

48)A： dʒu-gú-gol-úl-i:lɛ　○ ● ○ ● ○○ ○　L H L H L L
「彼は君のために洗った」

B： dʒu-gú-bamb-ál-i:lɛ　○ ● ○ ● ○○ ○　L H L H L L
「彼は君のために皮を張った」

このように，マテンゴ語では声調を有する単位は，音節ではなく，モーラである。Ｈが２モーラの音節に現われた場合には，通常Ｈは１モーラめに配分され，音節としてはＦで現われる。何らかの理由で，２モーラ音節の２モーラめにＨが配分された場合には，音節としてはＲで現われる。Ｒの音節は，その直前のモーラがＨでなければ，Ｈで現われることもある。これは自由変異である。

litɔ́:li　LRL → litɔ́:li　LHL　「子牛(5)」
cf. kílă:si　HRL　＊kílá:si　「ジャガイモ(7)」

音節主音的鼻音も１モーラであるから，声調を有する。しかしながら，音節主音的鼻音が声調を保持するのは，それが語頭に位置する場合だけである。語中に位置する場合には，そのモーラを先行する母音にゆずってしまうので，同時に声調も保持できなくなる(3.2.2. 参照)。その場合には，音節主音的鼻音が持っていた声調も左隣のモーラにずれて現われる。

49) ŋ́hi:ŋgă:na　「畝 sg(3)」　● ○○ ○● ○　H L R L
múŋhi:ŋgă:na　「畝の中(18)」　● ○○ ○● ○　H L R L

cf. 49') míhi:ŋgă:na　「畝 pl(4)」　● ○○ ○● ○　H L R L
mwimíhi:ŋgă:na「畝の中(18)」　○ ● ○○ ○● ○　L H L R L

50) túŋkɛmî:tɛ

○ ● ○ ●○ ○ → ● ○ ●○ ○ H L F L

tu ŋ kɛ mi: tɛ tu ŋkɛ mi: tɛ

tu - a[17] - mu - kém - itɛ 「我々は彼を呼んだ」

S1pl- 過 T - O3sg - 「呼ぶ」 - 完 F

cf. 50') tugúkɛmîtɛ ○ ● ○ ●○ ○ L H L F L

tu gu kɛ mi: tɛ

tu- a - gu - kém - itɛ 「我々は君を呼んだ」

S1pl- 過 T -O2sg- 「呼ぶ」 - 完 F

[17] 形態論的には，過去を表わす時制辞 -a-があるが，これは後ろに音節主音的鼻音の接辞が付くことによって[u]になり，最終的には接辞 tu-の母音に融合してしまうので，音声的には現われない。この点に関する詳細は第５章「動詞」を参照のこと。

3.5. 表記法

本論文では，音素表記の場合には / /，音声表記の場合には[ ]で囲んで表わすが，これらの囲みがない場合には，特にことわりをしない限り，筆者の定めた以下のような表記法を用いる。

音素としての長母音は，それぞれ，i̱, e̱, ɛ̱, a̱, u̱, o̱, ɔ̱, と表記することにする。[dz], [d]は，/ dʒ /, / l / に / n /が先行した場合の異音であり，[ndz], [nd]は音韻論的には / ndʒ /, / nl / であるが，これらをそれぞれ ndz, nd と表記する。またその他の形態素の境界で音韻に変化が起こったものについても，単語として表わす場合には，変化後の音で表記する。鼻音に関しては，音節主音的鼻音には下に ̩ をつけて，m̩, n̩, ŋ̩ のように表わす。

声調は，音節単位で記することにする。高平板調(H)を ´，上昇調 (R) を ˇ，下降調 (F) を ˆ で表わし，それぞれの記号を母音の上に付す。印のないものは低平板調を表わす。例に挙げる単語や文に声調を記す場合，基底形ではなく，それらの前後にポーズがある環境での現われ方を記す。